An action research study to explore techniques for self-awareness of psychological distance from family members in type 2 diabetics

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2021-12-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池本 温美, IKEMOTO Atsumi メールアドレス: 所属: 金沢大学, 金沢大学, 金沢大学
URL	http://hdl.handle.net/2297/00064464

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

様式4A

学 位 論 文 要 旨

学位請求論文題名

An action research study to explore techniques for self-awareness of psychological distance from family members in type 2 diabetics

(2 型糖尿病患者における家族との心理的距離についての自己認識を促す技術を探究するためのアクションリサーチ研究)

著者名・雑誌名

Atsumi Ikemoto, Michiko Inagaki, Keiko Tasaki, Tomomi Horiguchi, Yuya Asada

Journal of Wellness and Health Care Vol. 45 (1) p7-16　2021 年 8 月 1 日掲載予定

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科保健学専攻

看護科学　領域

慢性・創傷看護技術学　分野

学籍番号　1529022001

氏　名　池本　温美

主任指導教員名　多崎　恵子

副指導教員名　大桑　麻由美

副指導教員名

研究背景と目的

2 型糖尿病の治療目標は健康人と変わらない生活の質を保ち寿命を全うすることであるとされており，患者は重症化予防や治療のため生活習慣を適正に保つように自己管理を継続しながら療養生活を送ることとなる．患者への社会的支援に関して，先行研究において家族からの支援が効果的であるとされる一方で，その悪影響も指摘されている．筆者は自身の先行研究において，患者と家族の関係について着目し，２型糖尿病患者の療養生活における“距離”という現象を明らかにした．その結果，家族からの心理的な距離を経験することは、継続的な自己管理にとって重要であることが明らかとなった．しかし，２型糖尿病患者は普段は心理的距離を認識しておらず研究者の問いかけがあることでのみ心理的距離について語ることができることも明らかとなった．

以上より本研究の目的は、2 型糖尿病患者が家族からの心理的距離という現象を認識するための技術を探求することである．

方法

本研究は 2 つの調査で構成された．調査 1 は著者と 4 人の 2 型糖尿病患者と 9 人の医療スタッフで構成され，アクションリサーチ手法を採用した．本研究の問題点は 2 型糖尿病患者が家族との心理的距離という現象を認識していないこと，解決の目標は患者が心理的距離を認識することであり問題の解決に向けて心理的距離を認識するための手法を探求した．アクション毎に適切な参加者を筆者が選定した．調査 2 では，調査 1 で明らかとなった手法を用い著者が 13 人の 2 型糖尿病患者にインタビュー調査を実施し，定性的記述分析を行った．これにより，調査 1 で探求した手法の有用性を確認した．

結果

調査 1 では，問題解決に向けて繰り返しアクションを起こすことにより心理的距離の認識の手法の探求を行った．アクション 1 において本研究におけるアクションリサーチモデルを設定した．このモデルではひとつのアクションに課題提起･コミュニケーションを用いたアクションと相互学習･リフレクション・課題解決が含まれている．アクション 2 以降はこのアクションリサーチモデルに則り研究を進行した．アクション 2 では心理的距離の認識の評価項目を決定した．評価項目は筆者の先行研究等より 5 項目を独自に作成した．アクション 3 において心理的距離の認識を促進するための計画を作成した．アクション 4 では計画の実施可能性の検討と修正を行い，アクション 5 において計画の実施を行った．実施後のリフレクションを踏まえて修正を加えた．アクション 6 におい

て，実施した手法が心理的距離の認識の評価項目を全て達成することができることが確認できた．よってアクション１からアクション６を通じて心理的距離を認識するための手法が完成した．

調査 2 では，新たな２型糖尿病患者にインタビュー調査を行うことで，調査１で完成した手法の有用性を確認した．その結果，参加者全員が心理的距離の認識の評価項目について想起した語りができ，手法の有用性が示された．

考察

先行研究より 2 型糖尿病患者にとって距離という言葉のイメージが悪いことや，アクション４において心理的距離という用語を使用することへの懸念があがり，患者の精神的負担を考え慎重に研究を進める必要があった．本研究で採用したアクションリサーチ法は反復法を用いる手法であり繰り返しのアクションで一つ一つ新たな課題を解決していく．そのため，新たな課題にも対処が可能であり，繰り返しの精緻化により改善を重ねることで，患者の精神的負担に対する懸念を軽減することができたと考える．また，アクションリサーチ法を用いた研究の課題として方法論の先駆けが不十分でありその妥当性が課題とされている．本研究では６つのアクションを経て心理的距離の認識の方法を明らかにした．また，調査２において調査１で作成された手法が有用であるかを確認した．このように，追加の調査を行うことでアクションリサーチ法の課題である妥当性について強化することができたと考える．また，アクションリサーチ法は参加者の変化のみならず変化するための具体的な手法についても明らかにすることができる手法であることが示唆された．

糖尿病看護への応用について，先行研究ではプライマリ看護介入の有効性が示されているが，これは糖尿病の知識や技術を取得するための介入にとどまっている．また，糖尿病教育看護に関して Diabetes ConversationMap™プログラムが存在し糖尿病患者が経験や知識を共有できるが家族との心理的距離という視点は使用されていない．これらの看護介入において本研究で明らかとなった手法を用いることで，家族との心理的距離という視点で，患者と家族の関係性をサポートしていくことが可能となると考える．

結論

心理的距離の認識のための技術の探求は，６つのアクションを含むプロセスの後に完了し，その後のインタビューによって，手法の有用性が確認された．

令和 3 年 8 月 19 日

博士論文審査結果報告書

学籍番号　1529022001

氏　　名　池本　温美

論文審査員

主　査（教授）　大桑麻由美　印

副　査（教授）　田中　浩二　印

副　査（教授）　多崎　恵子　印

論文題名　An action research study to explore techniques for self-awareness of psychological distance from family members in type 2 diabetics　(2型糖尿病患者における家族との心理的距離についての自己認識を促す技術を探究するためのアクションリサーチ研究)

論文審査結果

【論文内容の要旨】

先行研究にて、2 型糖尿病患者と家族の療養生活における心理的距離という現象とこの距離を経験することが自己管理を継続する上で重要であることを見出した。しかしこの距離は、2 型糖尿病患者自身には意識化されておらず、研究者の問いかけによってのみ語れるものであった。そこで本研究では、「患者が家族からの心理的距離を認識するための手法」を探求することを目的とした。

本研究は2つの調査で構成された。調査1では2型糖尿病患者と医療者を参加者としたアクションリサーチ法を用い、「患者が家族からの心理的距離を認識するための手法」を完成させた。調査2では調査1とは異なる2型糖尿病患者を参加者とし、調査1で見出された手法を実施し、面接調査と定性的記述分析によりその手法の有用性と妥当性を確認した。

調査 1 では、アクション 1 はアクションリサーチモデルの設定、アクション 2 は心理的距離の認識の評価項目の設定、アクション 3 は心理的距離の認識を促進する計画作成、アクション 4 は計画の実施可能性の検討と修正、アクション 5 は計画の実施、アクション 6 は実施した手法が心理的距離認識の全評価項目を達成するか確認した。調査 2 では全参加者が、心理的距離評価項目について想起し語ることができた。

【審査結果の要旨】

2 型糖尿病患者が家族との心理的距離を認識できる手法を、アクションリサーチによる繰り返しの精緻化により改善を重ね、完成させることができた。距離という言葉の持つ患者への侵襲性をも配慮して作成されており、「患者が家族からの心理的距離を認識する」という、糖尿病看護における新たな視点としての本研究の意義は大きい。また、変化するための具体的手法を見出すことができる研究方法としてアクションリサーチ法の有用性が示された。質疑では、アクションリサーチ方法、心理的距離の定義、距離が侵襲的という意味、評価項目、適切な距離、臨床での活用方法等、についてなされ、いずれも適切な応答であった。

以上、学位請求者は本論文の論文審査及び最終試験の状況に基づき、博士（保健学）の学位を授与するに値すると評価する。